



ホッケの陸上養殖スタート

全国初の実証実験 漁家経営アップに期待

白老町はホッケの陸上養殖事業に取り組んでいます。3年間で実証実験を進め、採算性を検証します。海洋状況の変化で秋サケやスケトウダラなどの主要魚種の漁獲量が伸び悩む中、新たな漁業の確立の可能性を探っています。ホッケの陸上養殖は国内でも初の取り組みで、成果と漁家経営の向上が期待されています。

養殖事業は虎杖浜地区に設置された5トン水槽で行われています。元北海道栽培漁業振興公社伊達事業所長で、地域おこし協力隊の川下正己さん、北海道大学発のスタートアップ企業の(株)AQSim（アクシム）などが連携して取り組みます。

海水を換えなくて循環させる閉鎖循環式による陸上養殖ではアニサキスなどの寄生虫が付かなく、刺し身などの生食用としても出荷でき、付加価値の可能性が広がります。

6月には同公社伊達事業所で生産された親魚29匹が水槽に搬入されたほか、現在は虎杖浜沖で捕獲された天然魚も加わった約50匹が養殖されています。秋から冬にかけての採卵・受精を経て、来春には8cmほどに育った稚魚も見られそうです。町では「今後は産学官の連携により、飼養に関する生育状況や水質、コストなどのデータ取得と分析を進め、漁業者とともに海洋環境に左右されない新たな漁業の確立を目指したい」と話しています。



養殖施設水槽内で飼育されるホッケ（水中カメラにて撮影）